なくそう子どもの貧困　まもろう子どもの権利

－子どもの権利の実態と貧困化について考えるつどい－

教育ネットワークぐんま・事務局長　針谷正紀

教育ネットワークぐんま主催の「なくそう子どもの貧困　まもろう子どもの権利ー子どもの権利の実態と貧困化について考える集いー」が９月１１日（土）５３名の参加の下に前橋市総合福祉会館で開催された。

保育園･中学校･高校現場からの子どもたちの貧困化の現状・取り組みの実践報告、元大学教授（臨床心理士）からの課題提起、フロアからの積極発言の三つがうまくかみ合い充実した集会となった。

最初に大野ゆう子おひさま飯塚保育園保育士が病気退職をした仲間の後を引き継いだ４歳児２１名のこどもたちとの１年７ヶ月の生活を熱く語った。不安定な日々の家庭生活の影響から奔放でやりたい放題、自分中心、ケンカが絶えない毎日の生活を変えていく実践に粘り強く取り組んでいく。生活リズムを確立するために近くの公園でめいっぱい遊び、毎日４ｋｍの散歩を通して子どもたちの力を引き出していく。夢中になって遊び、歌い、リズムをし、良い文化に触れ、話し合いを積み重ねていく。**楽しい仲間同士の生活の中から集団の力が大切であり、子どもは子どもの中で育って行くことに親と共に確信を持っていく。**親と仲良くなり、育てる苦労に耳を傾ける。親は聴いてくれる人がいることを喜び、子どもが変わり成長する姿をみて変わっていく。**親の感動、「育てる」ということを親と共有しあうことの大切さを教えてくれた大野保育士の報告だった。**

次に組合専従から久しぶりに現場に復帰した平石隆則渋川北中教諭は中学３年生の生活・学習から見えてくる経済格差の実態を３例報告された。

４月の家庭訪問のなかでＡ君の親は「子どもの進路のことも心配だけど、まず自分の仕事を探さないとどうにもならない」と以前より率直に生活の困窮さを話してくれた。

経済的な理由から修学旅行に行けなかったＢ君との触れあいを通して保護者の様々な力（生活力･判断力）不足が子どもたちの学力･社会力にもろに影響を与えていることを知り、学校を超えた連携の重要性を痛感。経済的困窮を抱える生徒にさまざまな援助をしようとする担任に対して**「教師として仕事を超えているのでは」という周囲の批判もあるのも現実である。**

８月の三者面談を通してＣさんの母親は「私立高校の入試って本当に理不尽に出来ているんですね。出来る子には特待生などの優遇措置がたくさんあるのに、出来ない家の子には全くそれがない。」出来ない子の家はとかく貧しく学力格差の連鎖が生まれている。義務教育の最終年度の中三はぎりぎりの中で、健気に頑張っている。今と未来を懸命に生きようとする子どもたちのために私たちが出来ることを一緒に考え行動化していきたいと平石報告は結ばれた。

２００４年４月に**３９名入学し**、２００７年３月に**２８名卒業していった**新田暁高校船橋聖一教諭が担任をしたクラスの生徒たちの現実にも「貧困化の進行」がみてとれる。授業料無料化が実現しても全校の１割強の生徒の「ＰＴＡ会費･生徒会費･体育等後援会費」は学校全体のＰＴＡ会費から支出しているのが現実だ。**「教師の仕事の範囲を超えること**

までする必要があるのか」という周囲の批判を背に受けながら、卒業後就職したものの仕事のなかみに意義を見いだせず進学を希望する双子の姉妹に対して「国民生活金融公庫からの融資」を受けさせることで学資を確保させ専門学校、大学へ進学させた船橋実践は現場の教師が経済的困難にある生徒にどこまで支援出来るかを示す注目される実践であった。

現場からの３報告を踏まえ、横湯園子元中央大教授（臨床心理学）は貧困問題が子どもに及ぼす深刻な影響を「関係性の構築・信頼の回復への道を探りつつ」１時間にわたり自らの実践事例を踏まえ問題提起された。

所得の実質的低下、非正規雇用の加速的増加、生活保護基準の引き下げなど、国民生活全体が悪化している最中に世界金融危機が襲いかかった。貧困問題が子どもに及ぼす影響は深刻で、「高熱でも留守家庭に放置されている子ども」「万引き・盗みを繰り返す空腹児」「授業料が払えず中途退学していく高校生」「放置される犯罪被害児」「ネグレクトを含む被虐待児の増加」「絶望と無力感による自殺願望と未遂」「母子家庭の困窮」など枚挙にいとまがない。**家族形成と子育て困難の広がりは言葉を失うほどで、子どもの生活にも大きな影響を与えていて子どもに関わる福祉・教育・医療・精神保健などの各分野でも事態は深刻になっている。**

横湯さんは自身が関わった次の事例

＊不況の影響を受けた家庭の都市貧困層への転落が危惧された例

＊困窮化していく家庭生活と子どもが直面する困難についての例

＊低所得家庭で育った母親とその子どもがが遭遇した困難の例

を分析し、私たちに以下三つの問題提起をされた。

① 経済的困窮、貧困という視点

・生活の直視・直面を

・子どもたちは現実を理解出来る

② 関係性の再構築の視点

・本人が求めているように関わる

・語り、聴き取られることによる主体性の回復と確立

・その子どもその子どもと家庭にとって必要な領域との連携と協同関係性の再構築の視点

③ 命の安全と尊厳への配慮

危機介入時であっても、本人の意思の尊重と確認、尊厳を護ることを同時に行う横井講演は問題を抱えながらも健気に生きる高校生と協同のフロアで生きる定時制教諭の発言や子どもと父母、保育士が協同して豊かな教材で、全ての子どもの発達をめざす実践、それを喜びとする大人たちの発言ともつながるものであった。

ゆっくり、たっぷり何度も語りかけ、自ら語り、同時に協同して困窮に直面するひとたちの話を聴きとる。「学校・教師のしごとの枠を超えるしごと」と言われても、目の前の子ども、困窮者への支援は迫られている。公的な支援の紹介はもちろん、子どもや困窮者に関わる福祉・教育・医療・精神保健などの各分野の人たちが、「子ども、困窮者のステージに入り協同してやれることをやる」それが貧困化からの脱出の第一歩であることを教えてくれた集会だった。